

「詰まらない村」のススメ

村のこれからを考えるための豊田市への視察。一泊二日にぎっしりスケジュールが詰め込まれ、情報の多さに頭が悲鳴をあげながらも多くのヒントを持ち帰った。

同市では山村地域の課題解決に向けて、私たちを受け入れていただいた「おいでん・さんそんセンター」が取り組んでいる。このセンターのあり方が出色だった。行政の一部である出先機関として事業の受託収入が9割を占めながらも一般社団法人としての格を持ち、民間組織の軽いフットワークと自在な発想を特長として住民目線で活動する。行政と民間の間で柔軟に動き、都市と農村をしっかりとつなぐ。地域の人々が主役で、彼らが動き出したらもう口を挟まない。中間支援のあり方として実によくできていた。

代表理事は市役所で産業部長、総合企画部長を務め、「勝ったものが強い」というかつての経済成長期時代を経験している。その彼をして、時代は「もう勝ち負けではない」と語らせる。センタースタッフに対しても、自分の暮らし方が第一。在宅ワークやフレックス制を導入し、副業も自由。「毎日が遊んでいるようで楽しい」と笑う。

同センター5年間の活動で見えてきたものは、都市部と農村部の支え合いが持続可能な社会をつくるということ。農山村を町のようにするのではなく、しっかり農山村らしく磨き上げ、安心できる暮らしが続くことが活性化になる、と。さらに見逃せないのが、このセンター立ち上げの影の立役者が移住者だったという事実。移住者受け入れによって山村地域が持続可能になる、という。豊富な資金を注入して社会基盤や制度を整えることでは人口減を食い止めることができなかつた、という過去から学んでいた。

このセンターを中心に、多くの事業が立ち上がっていた。訪れたのは廃校を活用したものづくりの場。田舎暮らしを希望する若者のための一時受け入れシェアハウス。獣害解決のためのジビエレストランや加工場。山村体験ができる民泊農家、など。どれもが地域の資源を存分に生かし、暮らす者たちが主体的につながり、手わざでつくり、支え合う場ができていた。

さて、東白川村はどうか。この村には豊田市に負けない豊かな自然がある。相互扶助で生きる地域がある。伝承技術がある。文化芸能が残っている。みんなで一緒につながり、重なり合い、分かち合っていくことができれば、さらに豊かな村となり、これからの子どもたちに永く誇ることのできる東白川になるはずだ。そんな村の未来への可能性を信じることのできる視察だった。

これまで「美しい村」の美しい、という言葉の意味をずっと考えてきた。風景、川、水、空気。東白川村の美しさは多くが自然に由来するもので、それらが観光や地域づくりの資源となる大切なものだと当然のごとく思ってきた。ただ、ここにもう一つ欠けてはならないものがある。それが、人の心の美しさだ。視察の中で、縁あって「観光のカリスマ」と誰もが一目置く人物に引き合わせていただくことができた。元足助観光会長の小澤庄一さんその人

で、今の足助に人が集まるのはすべて彼の先見の明と辣腕だったという。何気ない雑談の中で彼は「美しい村にすることだ」とおっしゃった。美しい村とは何かと問うと、一瞬間をおいて「人の心が美しいことだ」と続けられた。この言葉によって、目前にあった霧はすべて晴れた。美しいというのは、永く愛される必須条件だ。歴史的にも美しいものは残り、そうでないものは消えてきたはずだ。美しい村は残っていくだろう。

ぼくが東白川村に移住することを決めたのは、自然や風景の美しさもさることながら、ここに住まう人とのご縁が何より大きな部分だった。美しい自然は日本の里山ならどこにでもある。魅力のある人々がここにいて、ご縁があったからこそ、ぼくらはここで暮らすことを決めた。そして今もなお、毎日感謝の中で暮らせているのは地域の方々に魅せられているからこそだ。気恥ずかしさを抑えてエイっと言ってしまえば、お世話になっている方々を「美しい心」を持っているとさえ思う。しかし人の心は生きもので、事情や環境で変わっていく。世代によっても異なる。人間だからこそ好き嫌いなどの感情は当然あるし、心には裏表がある。

人の心が美しい村にしよう。しかし人の心は揺れ動く。だから美しいまま保とうとする必要はない。ではどうすればいいかということだが、その方法への答えも今回の視察とこれまでの暮らしの中にあった。それが、「つながる」「重ね合う」「分かち合う」ということだ。そしてここに、東白川のお年寄りから身を以て教えていただいた「惜しまない」が入る。こうして書いてみると、これらを自然体で実践されている村の人物が、ぼくには何人か思い浮かぶ。難しいことだが、すでに先人がいて学ぶことができるというのはありがたい。

これからも持続する村とは、美しい人の心を大切にする村のことだ。自分だけが良ければいいというのではなく、地域で手を取り合い、暮らし働き続けること。地域の良いことと悪いことを分かち合って、良いところはさらに磨き、悪いところは嘘をつかず補い合って認め合う。繋がらない、分かち合わないということは、詰まっているということだ。だから詰まらない村にしよう。ここに魅力ある村が生まれるだろう。世界を変えたかったら、まず自分が変われと言う。視察後は、自分から少しずつできることから始めている。そんな素晴らしいきっかけを与えてくれた視察だった。

以上